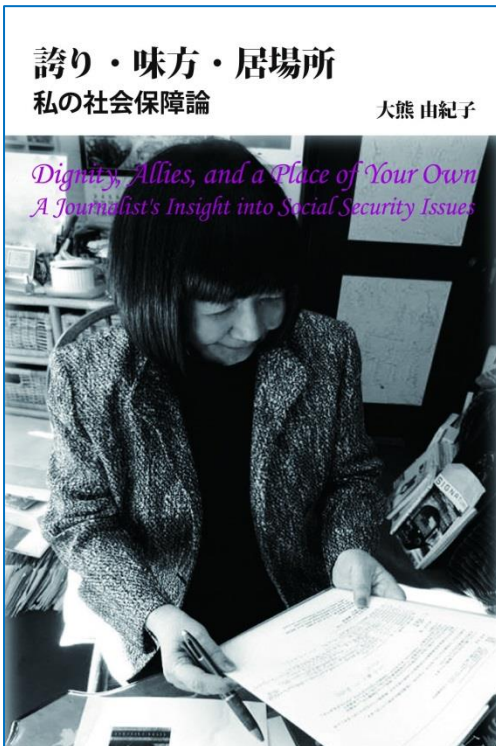


ジワーッと色々な思いが読後に残り、元気まで頂ける。

## 誇り・味方・居場所——私の社会保障論

単行本（ソフトカバー） - 2016/3/15

大熊 由紀子 (著)



1990年の『寝たきり老人のいる国いない国』によって、著者の名前を知った人も少なくないと思う。僕自身、20年以上前の学生時代にこの本と出会い、日本以外の国では、こんなに尊厳ある暮らしを支える福祉社会があるのか、と感動した。自分自身が福祉領域に関わることになった、きっかけを作ってくれた「原点」の一冊でもある。

その著者が、その後25年間取材をし続けてまとめたのが、今回の『誇り・味方・居場所』。このタイトルに込められているのは、日本の中にも、この3つを重視することで、実現出来た成功例も沢山ある、ということ。医療福祉の「えにし結び」を自認する著者ゆえに、紹介される事例は、実に広範囲だ。

予防歯科、えん罪、パッパ・クオータ、ウォシュレット、幻聴さん・・・一見すると何のつながりもないよ

うに見えるこれらのトピック。それが、福祉や医療における「誇り・味方・居場所」という三つの言葉で、見事に繋がっていく。

とはいえ、精神病院に認知症患者を入れる風潮や「子宮頸がんワクチン」問題、医療過誤問題など、日本の医療福祉の課題も、ズバリと指摘する。タコツボ化した医療・福祉の専門書にはない、有機的なつながりを示す万華鏡の世界。

そして、圧巻は、なんと言っても著者自身が、「まだらぼけで独り暮らし」で「悪性リンパ腫第4期」と診断された90歳の母を「通い」で看取るまでを綴った、第三部の「わが母の地域包括ケア」。25年前には夢物語だった、「誇り」を持って、自分の「味方」に囲まれて、安心できる「居場所」で暮らし続けること。それを、当事者家族という経験を通じて証明しているだけでなく、親子の愛情が行間からにじみ出てくる。

やわらかな文体で、スーッと文章が心に入ってくるけど、ジワーッと色々な思いが読後に残り、元気まで頂ける。

この四半世紀の間に、日本の医療や福祉の現場・政策において、「できたこと」「できなかったこと」を振り返る通信簿的な一冊でもあります。

アマゾン・カスタマーレビューより 投稿者 ばた 投稿日 2016/3/20